

## てんりんじ 轉輪寺の文化財群

明星地区の伊勢街道沿いに建つ轉輪寺は、寺の言い伝えによると、元は本教寺<sup>ほんきょうじ</sup>といい、文明13年(1481)頃<sup>ぶんめい</sup>に本教上人<sup>ほんきょうしやうにん</sup>が建てたといわれています。本教上人は、加賀国能美郡<sup>かがのくにのめぐみぐん</sup>(現在の石川県)出身で比叡山延暦寺<sup>ひえいざんえんりやくじ</sup>で修業し、諸国を巡歴した後にこの地に寺を建てました。本教寺は後に、真宗高田派<sup>しんしゅうたかだは</sup>に改宗し、現在の轉輪寺<sup>てんりんじ</sup>という名前は、江戸時代中頃の元禄15年(1702)に変更したものです。

現在の本堂は文政7年(1824)に工事を始め、天保9年(1838)に完成したものです。元の本堂は庫裡<sup>くり</sup>として使用されています。

天保2年(1831)からは高田派本山である津市の専修寺の御通所として代々の法主が伊勢神宮へ参るときの休泊所となるなど格式のある寺でした。このように轉輪寺は、由緒も古く、明治の廃仏毀釈<sup>はいぶつきしゃく</sup>を免れたため、数多くの文化財が伝えられています。



天保9年に完成した現在の本堂



明治頃に描かれた轉輪寺の様子

キーワード：指定文化財、轉輪寺、明星、伊勢街道、建造物、工芸品、美術品

てんりんじ くら  
轉輪寺庫裡 町指定

種別：有形文化財（建造物）

指定年月日：昭和 56 年（1981）10 月 27 日

所有者：宗教法人轉輪寺

元は本堂として使われていた建物。間口実長9間、奥行7間の横長寄棟造り。

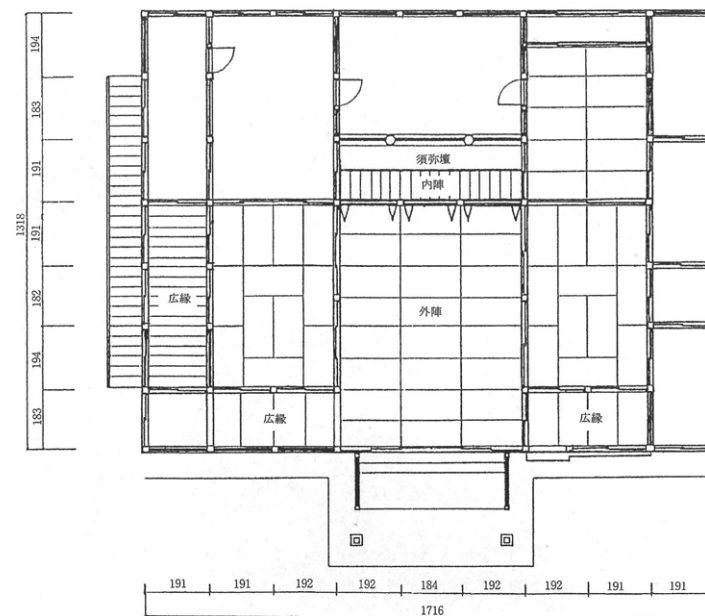
建てられた時期に関する史料や棟札などはありませんが、お堂の形態や意匠は古式なもので、鬼瓦の一つに「明暦3年（1657）8月、小林次郎兵衛作」というへう書きが確認できます。この瓦の時期は、寺を中興した2世法性院慶寿がいたところで、この頃か3世の信海の頃に建てられた可能性があります。

堂内平面は、正面と両側面の3面に1間の広縁をまわした整型6間取りとなっています。

内陣の欄干には、桐に鳳凰の透彫りを入れて飾り、両開き戸には細かな縦棧を入れ、腰部分にも花鳥の透かし彫りがはめられています。

来迎柱以外はすべて角柱で、もともとの建物の構造を復元すると、禅宗方丈式と一致する点が多数みられます。

庫裡は、15世紀後半に創建されたとする本教寺から現在の轉輪寺までどのような歴史的経過をたどってきたかを知るために重要な建造物です。





てんりんじ  
轉輪寺表門 町指定

種別：有形文化財（建造物）

指定年月日：昭和 56 年（1981）10 月 27 日

所有者：宗教法人轉輪寺

伊勢街道沿いに北面する本  
瓦葺きの一間一戸の薬医門と  
いう形式の門です。建てられた  
詳しい時期は不明なものの、  
玉城町にある田丸城から移さ  
れたと伝えられています。



表門

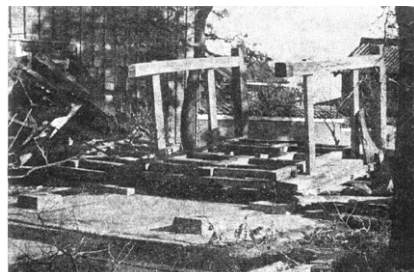
地方の寺院としては大きな  
門で、主要な部材はケヤキが用いられています。

伊勢湾台風時に倒壊しましたが、その後復旧されました。

また、南にも門があり、こちらは松阪市の松坂城から移築し  
たものと伝えられており、本郷集落からの葬列はこちら側から入  
る決まりがあります。



南門



伊勢湾台風時に倒壊した表門

どうしやう  
銅鐘 町指定

種別：有形文化財（工芸品）

指定年月日：昭和 56 年（1981）10 月 27 日

所有者：宗教法人轉輪寺

江戸時代前期の延宝 8 年（1680）  
に作られたもので、口径が 88 cm  
あり、やや胴長な鐘です。乳は五  
個五列で、池の間には牡丹と唐獅  
子の文様が表現されています。鐘  
を打つ部分は美しい八葉の蓮花が  
あしらわれています。



鐘楼

作者は津の藤堂藩お抱えの鋳物師だった辻但馬守藤原秀種  
で、とても優美な作品です。太平洋戦争時に各地の寺から鐘が  
供出されましたが、この鐘は辻但馬守の代表作とされ供出が  
延期されたことで、失われずにすみしました。鐘は寺の歴史だけ  
でなく、悲惨な戦争の歴史も伝えてくれています。

延宝 8 年に作られた  
ことが記されていま  
す。「明星山本教寺」  
とあり轉輪寺と変わ  
る前の名前が確認  
できます



じょうどさんぶきょうまんだら  
浄土三部経曼荼羅 町指定

種別：有形文化財（絵画）

指定年月日：平成 31 年（2019）3月7日

所有者：宗教法人轉輪寺



三部経曼荼羅とは、浄土教の根本経典である「観無量寿経」・「無量寿経」・「阿弥陀経」の三経典をわかりやすく布教するために、絵図でしめしたものです。轉輪寺には、制作時期は異なるものの、三部経の曼荼羅全てが良好な保存状態で伝来されています。

### ◎観無量寿経曼荼羅（絹本着色）

タテ 183.2cm × ヨコ 154.6cm

観無量寿経曼荼羅とは、どんなに悪い行いをした人でも、南無阿弥陀仏と念仏を唱えれば極楽浄土に往生できるという観無量寿経の教えを示している仏画です。

本図では、菩薩をはじめ仏たちには金彩を多用し、金泥を塗った上に、細かい文様までさらに細い金泥で描かれ、華やかで細かな作りとなっています。

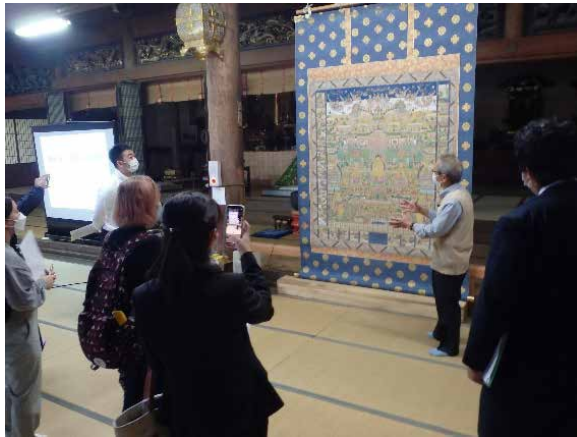
表具下部には金泥で、天和 3 年（1683）に「明星山本教寺現住沙門」（轉輪寺三世の信海上人）の発願で制作され、翌貞享元年（1684）に完成したことが記されています。

また表具部分の右側には金泥で制作に関係した結縁法名が多数記されており、多くの檀信徒によって、この曼荼羅が制作されたと思われます。

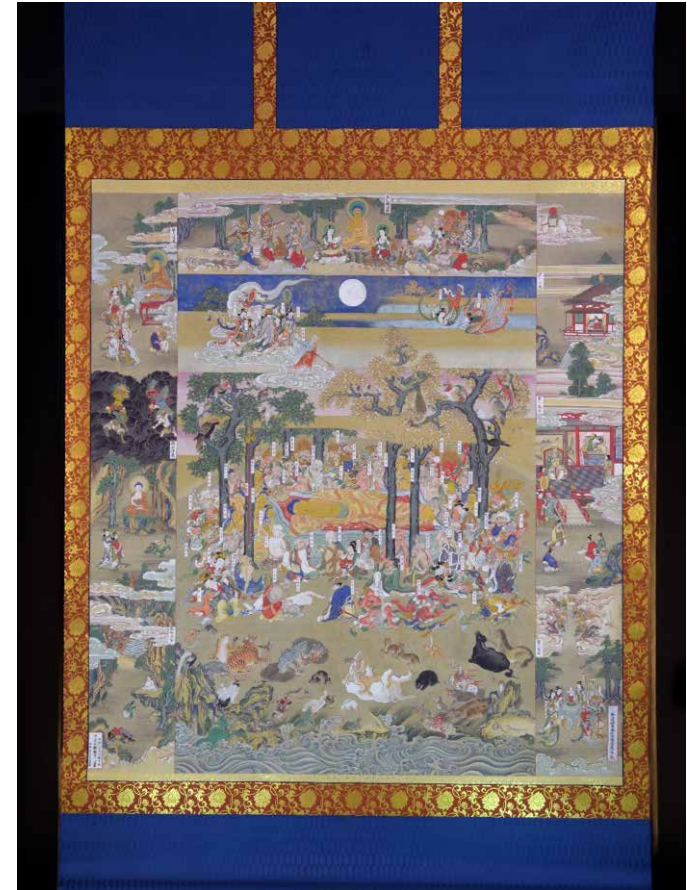


## 望月富文について

詳細な情報は不明ですが、轉輪寺所蔵の「八相涅槃図」(明和3年1766))に、「京師望月富文」と記されています。また、東京品川の大龍寺に丸屋福岡八兵衛が宝暦13年(1763)に奉納した大涅槃図にも「望月斎富文」の名前が確認されています。こうしたことから、望月富文は京師の絵師として、宝暦年間(1751-64)から明和年間(1764-72)頃に、仏画制作を中心に活躍したとみられます。なお、明和町平尾にも「望月富文画」と記された涅槃図が確認されています。

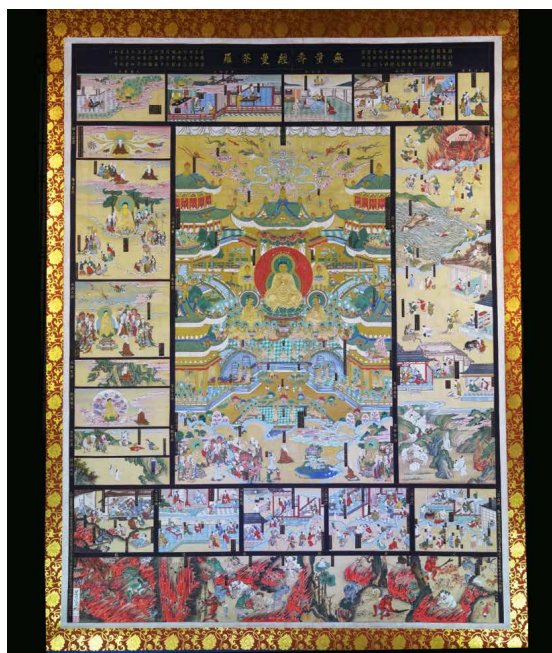


本堂では、住職による曼荼羅図の解説を聞くこともできるよ



浄土三部経曼荼羅とは別に八相涅槃図にも、「望月富文」と記されています

\*ただし、右下の奉納文が上書きされた部分には「望月平兵衛」の銘文が確認できます

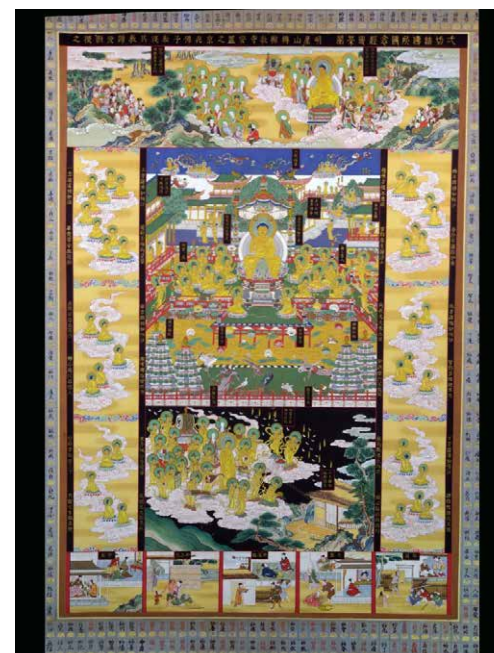


◎無量寿経曼荼羅（絹本著色）

タテ 213.2cm × ヨコ 160.3cm

阿弥陀三尊を中心とした極楽の様子が中央に描かれ、周囲には、無常・地獄などの諸相が描かれています。

画面左下の貼紙に「望月富文画」と名が記されています。図様は、高田敬輔（1674-1755）による「無量寿経曼荼羅」を基に描かれている点が注目されます。富文は、明和年間（1764-72）頃に、20 年ほど前に版刻された敬輔の図様を基にして、若干の改変を加えながら制作したと考えられます。



◎阿弥陀経曼荼羅（絹本著色）

タテ 136.1cm × ヨコ 93.2cm

極楽浄土や阿弥陀仏などの姿を描いています。表具一文字部分に銘文があり、明和7年（1770）に轉輪寺住持第七世教娛（1695-1776）、第八世教諦（1710-89）の発願であることが記されています。旧版『明和町史』では「京師望月富文筆」としており、現段階では詳しくわからないものの、年代的にも描き方の特徴においても富文が描いた可能性があります。